＜補助資料＞ 評価の実際と指導の改善（例）

【知識・技能】

題材の評価規準		◎Aの具体例　■Cへの手立て
知	形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。	◎形や色彩などが感情にもたらす効果を多様な視点から理解していたり、幅広い視野に立って造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージなどで捉えたりすることを理解している。 ■形や色彩などが感情にもたらす効果をより実感的に理解できるよう、身近な体験などと関連付けて考えさせる。
技	水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	◎身に付けた水彩絵の具の生かし方を基に、表現方法の試行錯誤を重ね、表現の意図に応じて創意工夫し、よりよく表している。 ■具体的な筆づかいや水彩絵の具の生かし方について実演を行いながら説明し、試させたり、主題を確認させて生徒自身が表したいことを整理させたりする。

（ア）「造形的な視点を豊かにするための知識」について

ここでの知識は、表現や鑑賞の場面において、学んだ知識を生かして、形や色彩などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージで捉えたりできるようになるなど、単に暗記することに終始するような知識ではなく、美術の学習の中で生きて働く知識として実感的に理解した実現状況を評価することが求められます。

本題材では、観点別学習状況の評価の総括に用いる評価としては、「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、全体のイメージで捉えること」について実感的な理解をしていれば、そのことは作品にも現れてくると考えられます。そのことから、第二次において作品から、技の水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表しているかを評価する際に、知の形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージで捉えられることを理解していることを併せて見取り、知と技を一体的に評価しています。単に、花の形を描き、花びらは赤で、葉や茎は緑で塗るのではなく、例えば、発想や構想をしたことなどを基に、花の柔らかさやあたたかさ、全体のイメージなど意識しながら花びらの形を描いたり着彩したりすることが大切であり、評価もその視点から知と技を一体的に行うことが考えられます。また、ある程度、造形的な視点について理解はしているが、造形的に表す技能が十分に身に付いていないことで完成作品からだけでは知が見取れない生徒がいることも考えられるため、授業外において、発想や構想の学習で作成したスケッチや、鑑賞活動でのワークシートなどで再確認することとしました。

右の生徒のワークシートでは、たくさんの花をそれぞれが輝く仲間に見立てて、色々な花がどんどん咲いてきて生き生きとしたあたたかい感じが出るように表すために、花の大きさを変えたり、にじみや色を重ねたりするなどの工夫が読み取れます。作品やワークシートの記述からは、この生徒が、形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解しながら、意図に応じて工夫して表していることを見取ることができます。

＜生徒の作品とワークシート例＞

＜生徒のワークシートの記述（部分）＞
作品名「生き生きと輝く仲間たち」
色々な花がどんどん咲いてきて生き生きとしたあたたかい感じが出るように，花の大きさを変えたり，にじみや色を重ねたりして表してみました。

（イ）「技能に関する資質・能力」について

技能は、制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものであるため、制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の創造的に表す技能の高まりを読み取ることが大切です。

本事例では、「２．制作（３時間）」の１時間目において、水彩絵の具の生かし方を身に付けているかどうかを見取り、身に付けられていない生徒の指導を中心に行いました。制作が進んできた２時間目から３時間目にかけて、多くの生徒が水彩絵の具の使い方を工夫して表現できるようになってきた時点で、工夫ができていない生徒に重点を置いて見取るとともに、工夫ができるように指導をしました。完成が近づいてくる後半は、「十分満足できる」状況（Ａ）と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定しました。また、授業中に評価を行った後に作品が変化する場合もあるので、さらに作品の完成後、授業外に完成作品をワークシート等と見比べながら完成作品からも再度確認することが大切です。

【思考・判断・表現】

題材の評価規準		◎Aの具体例　■Cへの手立て
発	花を見つめ感じ取った花や葉の形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係を考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。	◎花を深く見つめて幅広い視点から花や葉の形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、独創的な視点から画面全体と花や葉なとどの関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 ■様々な花を用意し、他の花に向き合わせたり、身近な体験などと関連付け、再度主題について考えさせたりする。また全体と部分の関係が分かりやすい作品を用い表現の意図と工夫について考えさせる。
鑑	造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	◎多様な視点に立って、造形的なよさや美しさをより深く感じ取り、主題と表現の意図と工夫などについて関連付けて捉え、自分なりの根拠をもって考え、見方や感じ方を広げている。 ■生徒自身の表現の活動における主題と表現の意図と工夫について振り返らせて、表現で学んだことと関連させながら見方や感じ方を広げられるようにする。

（ア）「発想や構想に関する資質・能力」について

発想や構想は、制作が進む中で徐々に具体的な形になり、更にそこから深まることが多くなります。そのため制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の発想や構想に関する資質・能力の高まりを読み取ることが大切です。

本事例では、作品の完成が近づいてくる段階で、「十分満足できる」状況（A）と判断される生徒も見取れるようになり、授業での評価を確定します。また、ここでの評価は創造的に表す技能と同様に、授業外においても再度評価し、授業中での評価より高まりがあった場合には修正を加えることが考えられます。

（イ）「鑑賞に関する資質・能力」について

本事例では、第一次にも鑑賞的な活動を位置付けていますが、ここでのねらいは、発想や構想に関する学習を深めるための活動であるため鑑は位置付けていません。第三次の鑑賞の活動は、作品から造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げることをねらいとしていることから、鑑の評価の対象として位置付けています。しかし、授業中に鑑賞の指導をしながら全ての生徒を評価することは困難であることから、授業中は、ワークシートの記述や発言の内容等から、鑑賞が深まっていない視点等について、個々の生徒や学級全体に助言をすることに重点を置くことが考えられます。加えて、生徒の発言の内容に、「十分満足できる」状況（A）に該当する場合がある場合は、その評価を記録しておきます。観点別学習状況の評価の総括に用いるための評価は、授業終了後にワークシートの記述を基に評価することが基本になります。

【主体的に学習に取り組む態度】

題材の評価規準		◎Aの具体例　■Cへの手立て
態表	美術の創作活動の喜びや味わい楽しく花の美しさ花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。	◎自ら進んで表現の活動に楽しく関わり、常によりよい表現を目指して、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えようとしたり、独創的な視点から心豊かに表現する構想を練ろうとしたりすることや、表現方法の試行錯誤を重ねて創意工夫しようとし、粘り強く表そうとしている。 ■形や色彩などが感情にもたらす効果をより実感的に理解できるよう、身近な体験などと関連付け考えさせたり、主題を確認させて生徒自身が表したいことを整理させたりして、再度主題について考えさせる。
態鑑	美術の創作活動の喜びを味わい楽しく造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどの見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。	◎自ら進んで楽しみながら、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えようとしたり、作品のよさや美しさなどを新しい視点を探しながら感じ取ろうとしたりし、見方や感じ方を粘り強く広げようとしている。 ■自分の作品の意図と関連させ、他者の作品の特徴やイメージなどについて気付かせるようにする。

特に表現活動では、発想や構想を練るためにアイデアスケッチを熱心に繰り返し描いたり、造形的に表す技能を働かせるために絵の具で色を試したり塗り重ねたりするような能動的な姿が授業の中で現れることがあります。机間指導等の際にこのような試行錯誤を繰り返し粘り強く取り組んだり、よりよい表現を目指して構想や技能を、工夫改善したりしていく様子などの姿を捉えながら指導と評価を行うことが大切です。

また本事例のように、題材のそれぞれの時間の学習活動に該当する「知識・技能」、「思考・判断・表現」の題材の評価規準と対応させて、より具体的に生徒の「主体的に学習に取り組む態度」における実現状況を見取ることが大切です。